3・4 歳齢児童の自由遊び場面における遊び行動と社会的能力

山口　祐希奈

【背景・目的】幼児期の遊びは子どもの発達に重要な影響を及ぼす。また、3・4 歳齢頃から言語能力や心の理論能力、共感性といった社会的能力が発達する。社会的能力は遊び行動に密接に結びついていると思われるが、ほとんどの研究は小学生や大学生を対象としており、3・4 歳齢児を対象としている研究は少ない。また、仲間関係や社会的能力についても保育者への質問紙調査を用いているものが多く、自由遊び場面で捉えているものは少ない。したがって、行動観察を通して自然なやり取りから、仲間関係を算出することは、生態学的妥当性を高めると考えられる。そこで本研究では、3・4 歳齢児を対象に、1. 集団保育場面において、遊び行動や社会性の詳細を明らかにすること、2. 言語能力、心の理論能力、共感性といった 3 つの社会的能力が遊び行動や社会性に与える影響を明らかにすること、3. 3 つの社会的能力と仲間関係の深さや広さの関係を明らかにすること、の 3 点を目的とした。

【方法】大阪府内にあるこども園の 3・4 歳齢児クラス 1 クラスを対象とした。協力児は、34 名（男児 20 名、女児 14 名）であり、観察開始時点での平均月齢は、49.29±3.45 ヶ月であった。自由遊び時間に、個体追跡サンプリングで協力児1人につき20分間観察し、その中で行われた遊び行動および社会性を記録した。また、スキャンサンプリングによる児の近接関係のデータから、中心性の指標を算出した。さらに、協力児の社会的能力を測定するため、語い検査、誤信念課題、共感性課題を 1 人ずつ行った。

【結果・考察】(遊び行動・社会性）最も多かった遊びは構成遊びで、身体遊びやごっこ遊びは少ないという結果になった。3・4 歳齢段階の遊びは場所やおもちゃの影響を受けやすいと考えられる。また、遊んでいる時には、相互交渉をしていることが多いことが分かった。(遊び行動と社会的能力）心の理論を獲得していると、移動が多く、会話につながるという結果になった。また、身体遊びは移動中に生起したものが多かったので心の理論能力と身体遊びにも関連が見られた。さらに、心の理論を獲得していると、構成遊びが少ないということも考慮すると、心の理論を獲得していると移動を介して他児のところへ会話しに行くことが多いのではないだろうか。また、表情弁別能力が高いと、傍観は少なく、構成遊びが多いということ、他児と相互交渉をしながら遊んでいることが多かった。この結果から、表情弁別能力が高いと他児の様子を見るというより、主体的に遊ぶことが多いと考えられる。(社会性と社会的能力）表情弁別能力が高いと相互交渉をすることが多かった。このことから、人の表情をうまく理解できると、相互交渉に至りやすく、長く交渉を続けることができると考えられる。また、相互交渉は自分と同程度の言語能力を持っている児としやすいということが分かったので、3・4 歳齢児では、言語能力が高いからと言って相互交渉に至るのではないと考えられる。(中心性と社会的能力）中心性と児の社会的能力の間には関連が見られなかった。(性別と遊び行動）男児は身体遊び、構成遊び、物体遊びを多く行い、女児は男児に比べて絵本遊びやごっこ/ルール遊びが多いことが分かった。周りの環境の影響も考えられるが、3・4 歳齢児において性別によって選択する遊びが異なっている可能性がある。(性別と中心性）男児が女児よりも中心性が高かった。3・4 歳齢頃は、同性の児同士で遊ぶようになる時期である。協力児のうち男児が女児よりも多かったため、自然と女児が近接する児は限られ、このような結果につながった可能性も考えられる。

これまではあまり検討されなかった 3・4 歳齢児の社会的能力と遊び行動の関連について検討したこと、そして従来の質問紙調査ではなく、行動観察から仲間関係を算出し、これらの結果を得たことが本研究の大きな意義であるといえる。(比較発達心理学)